

第 6 章

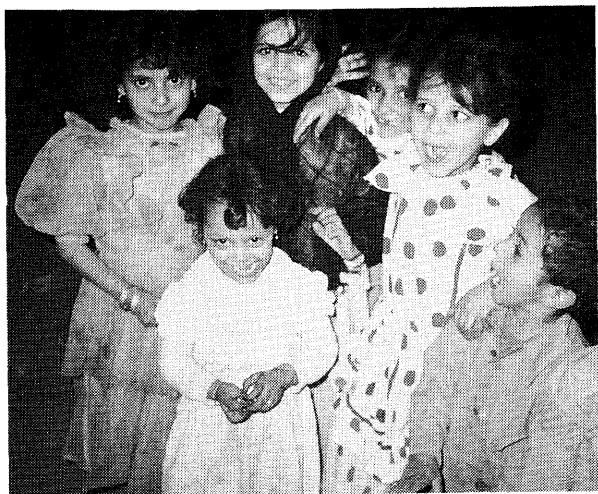
人生

子供

イエメン人にとって人生の最大のイベントは結婚式だが、それに次ぐイベントは子供の誕生である。いくら貧しくても、男と女がいれば子供を産むことはできる。そして、子供が無事育ったあかつきにはその子が働いて、親を養ってくれる。働き手になる子供が多いほど、親は楽ができる。だから子供は最大の投資である。それに国家による社会保障など当てにできないから、老後の保険としても子供は重要である。

どこでも子供はかわいいものだが、イエメンの子供たちもやっぱりかわいい。特に女の子には美人が多い。ふだん女性の顔を見る機会がないのでベールをしてない少女を見ると、ことさらドキッとしてしまうという事情もあるが、三〜四歳くらいの女の子だつて立派に美人である。少女たちは一般に、目がぱっちりとしていて、彫りが深く、口元がきゅつとしまっている。インド系、あるいはエチオピア系の血が感じられる顔立ちの子も多い。そして、例外なくスタイルがいい。これは男の子も同じで、肥っている子供というのはほとんどいない。

途上国の常としてイエメンでも子供はよく働く。女の子は幼い弟や妹の面倒をみている。母親たちの水汲みの手伝いも少女の仕事である。一方、羊の世話も少年の仕事である。小学校一年生になるかならないくらいの子供が、棒切れとバケツをぶら下げて二〇〜三〇頭もの羊と山羊の群れを追っている姿をしばしば見かける。町の少年は店番をしている者も多い。学校に通わなくても父親の店番をしている少年の計算は確かである。



サナアの少女たち。今日はちょっとおめかしして、指先にはヘンナ（化粧用の染料）で模様を書いてもらっている。

田舎では外国人の乗った車が止まると、真つ先に寄ってくるのは少年たちである。

少女たちはすでにイスラム教徒の女としての振る舞いを自覚し、遠巻きに一かたまりになつてこちらの様子を窺っている。カメラを取り出すと男の子たちは「ソウラ、ソウラ！（写真だ、写真だ）」と言いながら自分を撮つてくれとせがむ。「撮つてやるから並んでごらん」と言うとかメラの間近くに群がつてポーズをとる。なかに七、八歳くらいのおてんば娘が男の子と一緒に並ぶけれど、少しおしゃまな女の子に「だめよ！いけないことよ」とたしなめられて、あわてて列から離れる。

少年たちを撮っている間少女たちは、奇妙な顔つきの外国人の仕草のおかしさをク

スクス笑いながら見ている。少年たちを撮って、そのままカメラを少女たちが固まっている方へ向けると一瞬びっくりした顔ですくむが、次の瞬間にはキヤーキヤー言いながら家の陰に隠れる。それでも外国人の様子を観察したい好奇心は抑えがたいようで、こちらがモスクや段々畑を撮っているといつのまにかまた近寄っている。

あるいは、英語を学校で少しかじった子供は「ホワット・イズ・ユアル・ナイム」と聞いてくる。英語で「マイ・ネーム・イズ・サト」と答えると、別の奴がまた「ホワット・イズ・ユアル・ナイム」と聞いてくる。放っておくと英語の練習台にされてしまう。そこで「君の名前はなんて言うの」とアラビア語で言うと「アラビア語しゃべれるの？」と驚き、同時に少し安心してわれわれをとりまく輪が狭まる。

「おまえたちはどこから来た」「何のために来た」と大人のような質問をしてくるのは、たいてい少しこましゃくれた少年である。十歳くらいの男の子でも、外国人の前では村を守る一人前の男として振る舞おうとしているのがかわいい。こういうのはきつと立派な大人になるだろう。

観光客が必ず訪れるような場所では、少し外国人ズレした子供が出てくる。そういう子は「ソウラ！（写真とって）」よりも、外国人と見ると「カラム？カラム？（鉛筆を頂戴）」と言ってまとわりついてくる。どこへ行っても他のものではなく必ず鉛筆なのはなぜだろう。これは、

一九八六年くらいからイエメン中に広まった現象であるように思われる。八五年までは「カラム？」はそんなに広まっていなかった。どうしてこんなことになったのかと言えば、それは外国人がいった鉛筆をやったからである。子供は、一度味をしめると「外国人は鉛筆をくれるもの」と思いこむ。ぼくのらむところ、この流行の犯人は八六年頃から本格化した「イエメン・アドベンチャー・ツアー」のフランス人とドイツ人の一行である。どうやらなかにはあらかじめ鉛筆を用意してくる人もいるようだ。もちろん彼らに悪気はない。むしろ「文字を知らないかわいそうな子供たちに」という人道主義的な善意から発した行動であろう。しかし、ものをねだる癖をつけさせるのがはたしてイエメンの子供たちにとって良いことなのかどうか、ぼくには判断しかねる。

ある時しつこく「カラム？」とまとわりついてくる少年に「鉛筆をなんに使うんだい」と聞いた。「学校で使うんだ」「学校行ってるのか」「うん」「自分の名前書けるのか」「書けるさ」と言うその子に、「じゃここに書いてごらん」と紙を差し出すと、その子は自分のポケットからボールペンを取り出して得意そうに名前を書いた。「なんだ、鉛筆あるじゃないか」と言うと、その子はしまったという顔をしながら「エへへ」と笑った。

また、外国人ズレがさらに進むと、こんどは品物を持って売りつけにくるようになる。観光地化した場所ではどこの国でもよく見られる光景である。山岳地のハジャラという村は崖の上

にそびえたように立っている村で、なかなか絵になる景色なので「アドベンチャー・ツアー」のお定まりのコースになっている。ぼく自身も何度か写真を撮りに行った。あるとき写真を撮っていると、村の女の子がちゃんとした刺繍のベルトを持って近づいてきた。それは明らかに、観光客用に作った代物である。ぼくはそれまでイエメンで子供が観光客に物を売ることを見たことがなかったし、この村でも前回来たときまでは一切なかった。だからこの女の子の出現はショックであった。理由は二つある。

一つは、ハジャラの村はそんなに貧しい村ではないこと。生活のために子供が観光客相手に物を売らなくたって生きていけるし、生きてきたのである。もう一つはその土産がひどくいい加減なものであったこと。本物であれば、まだ許せる。どうしてこんなものを作るようになったのだろう。たぶん先週や



羊飼いの少年。手に持つ木の枝1本と自分の声で羊の群れをコントロールする。音を出すためにブリキのバケツを持っていることもある。

つてきたツアーの観光客が、村の誰かが腰に巻いていたジャンビアー用のベルトが気に入り、売って欲しいと言ったのであろう。そしてきつとかなりいい値段で売れたにちがいない。確かにベルトのなかには、金糸・銀糸で見事にアラビア文字を刺繍したものがある。サナアのジャンビアー・スークの一画で作っているベルトは必ずしも観光客用ではないが、十分お土産になる。しかし、ハジャラではベルトを作っておらず、自分たちのしているベルトは、そうおいそれと売るわけにはいかない。そこでハジャラの人は考えた。「ベルトが売れるのなら作ればいい。実用的でないイミテーションでも外国人にはわかりはしまい」と。

これを買った外国人は、イエメン人が使うはずも、見たこともないような代物をイエメンのお土産として手に入れることになる。一方、偽物売るなんて誇り高きイスラム教徒のすることではない。つまりこのお土産はイエメン人にとっても外国人にとっても、何も良いものもたらさないのである。

こんなものを売らせるようになるのが、観光というものである。純朴さが失われていつて惜しいとか、悲しいとか、センチメンタルなことを言うつもりはない。イエメンだって外貨獲得のために観光を振興しようとしている。そして観光客誘致が軌道にのれば、こうしたことは世界中どこにも見られる現象なのだ。観光客がやってき始めたイエメンだからこそ、ぼくはこの現象の発生メカニズムを目の当たりにしたにすぎないのである。ほんの半年足らずの間に子

供たちが「カラム？」と言うようになり、一月余りの間に安物の刺繍を売るようになる、それは本当にあっけなく起こる変化であった。

観光客にとっては観光地の子供との出会いは、一生に一度であり、特別なことをしたいのはよくわかる。しかし、子供たちにとっては繰り返される日常なのだ。明日の観光客に対する彼らの態度を決めるのは今日のわれわれである。

子供の病気

イエメンで仕事をしている外国人は、しばしば約束の時間に相手のイエメン人が現れないという経験をしている。人間の言いわけは、どこでもそれほど差のないもので、たいていさほど遠くない身内が病気や危篤にさせられる。サナアは小さな町なので、言いわけに使えるほどの交通渋滞はない。

多くの日本人が誤解しているのだが、日本人だって大昔から時間と約束に厳格だったというわけではないらしい。幕末から開国にかけて、日本通の外交官として活躍したイギリス人のアーネスト・サトウは「日本人は約束を守らない」「怠け者である」などと日記に記している。われわれが今イエメン人に対して言うような文句は、百年ちよつと前に我らの祖先も頂戴していたのである。われわれのひいじいさんたちも結構ずぼらだったらしい。時間にずぼらで現代の世の中が動くか、といきまぐ人もいるだろうが、みんなの行動原理がゆつたりとしたペースであるかぎりは、時間が厳密に守られなくても世の中はちゃんと動いていく。ただそこに異な

るペースを持った人間（この場合は外国人である）が入り込んでくると、周囲のリズムともんちやくを起こすことになる。

ところで、イエメン人が遅刻したり、あるいは欠勤したりして、言いわけをするときによく聞かれるのが「子供の急病」である。日本人にしろ欧米人にしろ外国人は最初の二、三回は「子供が急病じゃ、しかたないね」とあきらめる。しかしそれがたび重なると、いい加減頭に来て「そんなにしょっちゅう子供が病気になるものか」と相手を疑うようになる。そして最後には「またそんな下手な言いわけして」と頭から信用しなくなる。こうして「イエメン人は無責任である」「イエメン人は約束を守らない」「イエメン人は嘘つきである」などという結論に達する。確かにイエメン人のなかに無責任な人はいる。

しかし、「嘘つき」と判断した根拠が「そんなに再々子供が急病になるわけがない」であるとしたら、結論を出す前にちよつと考えてみよう。もしかしたら嘘ではないかもしれないのである。まずあなたは自分の経験に照らして、どの程度の頻度だったら許容範囲と考えられるだろうか。日本人が日本にいる場合、子供が二人いるとして、ある朝起きてみたら子供が悪性の風邪とか、水疱瘡とか、階段から落ちるとかで、すぐ病院に連れていかなければならないという状況はどのくらいの頻度で起きるだろうか。乳幼児であれば年に四度くらい、子供二人で年に八回あるとしよう。その場合、奥さんが病院に連れていけば、旦那は会社を休まなくてもこ

とは足りる。もちろん奥さんも年に三日くらいは風邪をひいて動けないということもあるだろう。そして、運悪くこの日と子供の急病になった日が重なった場合、旦那は会社を遅刻しても子供を病院に連れていかなければならない。この緊急事態が起こる確立は三六五分の八（二人の子供のどちらかが急病になる確率）×三六五分の三（その日にたまたま奥さんが病気で動けない確率）＝一三万三二二五分の二四、つまり、約一万一一〇二日に一回である。言いかえると約三十年に一回である。子供だっていつまでも乳幼児ではないから、運が良い人ならこういう事態には一生に一度もめぐり合わない。

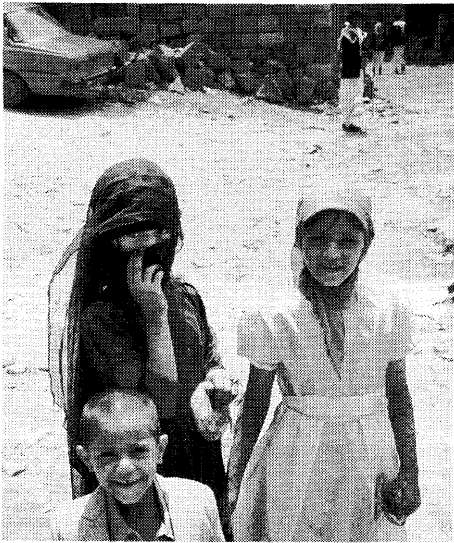
さて、イエメン人がサナアに住んでいる場合はどうか。イエメンでは現在平均して子供が三〜四人に減ってきている。とりあえず四人いると仮定しよう。イエメン人の子供が病気になる確率は日本の子供のそれよりも高い。栄養状態が良くないし、衛生環境も悪いし、子供の安全などに配慮した町づくりはされていないからけがの機会も多いし、交通事故の確率も高い。したがって、子供が病院に行かなければならないような病気・事故に会う確率を日本の倍と想定してもそれほど大げさではない。子供一人当たり、年間八日である。子供が四人いれば、年間三二日になる。さて、問題は、誰が病院に連れていくかである。サナアに四つしかない総合病院に行くための公共交通機関はない。病気の子供を連れて乗合タクシーに乗ることは困難である。自家用車で行くことになるが、女性はめつたに免許をもっていない。だから子供が病院に

行くときは、ほぼ必ず父親が連れていかなければならない。もちろん親戚の男が近くにいればその人でもいいが、地方出身者で近所に親戚がいなければ父親が行くしかない。そして当然仕事には遅刻する。こうした事態が起きる確率は三六五分の三二、つまり一二日に一回である。

日本なら三十年に一度しか起こらないような「緊急事態」がイエメンでは二週間に一度起こっても何の不思議もない、ということなのである。もちろん、これはかなり乱暴な計算である。イエメン人をかばいすぎているという気もしないではない。しかし、女性が自由に動き回れない社会では、男が仕事だけに命を懸けて邁進すればいいというわけにはいかないという事情は、理解できよう。

だから、イエメン人が「子供が病気で……」と言ったときに、頭から嘘だと決めつけないほうがいい。相手のイエメン人に「日本人は、子供の病気ぐらいで仕事を休んだりしないのだ、それが日本の発展の鍵だ。少しは勤勉さを見習え」と言いたくなる気持ちはよくわかる。ほく自身イエメン人の「働く姿勢」に関して文句を言いたいときはある。

しかし、乳児死亡率が日本の四〇倍の国（イエメンは千人当たり二〇四人、日本は千人当たり五人強）である。子供を病院に連れていくほうが、仕事の約束より優先されても文句は言えない。「子供の病気」と仕事とどちらが大事かの判断は、イエメン人自身に任せておいたほうがいいだろう。それに仕事が一日遅れたところで、こちらの命に別状はないのだ。



同じ年齢でもベールを被る子と被らない子がいる。顔を隠す仕草にはすでに「女」の雰囲気を感じられる。

一人前

女の子がいくつくらいからベールを被るようになるのかは、父親の方針で決まる。いわば家風である。また地方によっても少しずつ違いがある。だからまだ十歳にもならないようなちびちゃんもベールをしている場合もあれば、目元に結構なつぼさが出ててもまだ素顔を出している女の子もいる。

一般的には初潮を迎えるころにはみなベールを被り、男の視線から自らを守る体制に入る。

ベールの目的については二つの解釈が可能である。一つは女性が自分の貞節を守るためのガードであるという解釈。もう一つは女が男の目に触れないようにする（男のための）目隠しであるという解釈。女は男を誘惑し、正しいイスラムの道から踏み外させようとする魔物なのである。だから、男をそうした危険から守る

ためにベールを被らせなければならぬし、なるべく男の前に姿を曝さないようにすべきなのである。きわめて男中心の考え方である。女を見ると迷わされるなら男が自分で目隠しをした方がいいはずだ。もつともそうすると仕事にはならないが。

ベールの被り方や素材となる布の色や形は地方によってそれぞれ特色がある。黒いスカートに黒いうわっぱり、黒いスカーフに黒いベールという「黒づくめ四点セット」はもともと十九世紀のオスマン・トルコ支配の時代にサナアにもたらされた比較的新しいファッションである。いずれにせよベールを被るのは、この娘はもういつでも結婚できる状態にあるということの表明でもある。ベールによって「女の子」は「一人前の女」になる（もつともアラビア語にこの区別はないが）。

一方、男の子はいつ一人前になるのか。イエメン山岳社会では男が一人前になるとは、戦士として戦えるようになることを意味する。かつては十四歳くらいで一人前の戦士として勘定してもらえらるようになった。これ以後、男は常にジャンビニアを腰にさす。そしてライフルを持ち歩くことを許される。だから、ジャンビニアは「一人前の男である証し」なのである。別に元服式のような儀式はないが、時には父祖伝来のジャンビニアを譲り受けることもあった。これ以降、男は成人男子のみで構成される村・部族の会議（マジユリス）に参加できるようになる。部族長（ヘシェイフ）はこのマジユリスで成員の中から互選で選ばれるのである。現代風に



ジャンピーアをさすようになれば一人前。
当然カートも嘯みはじめる。

言えはこの選挙権を得ることが一人前になるということであった。

男の子は、ジャンピーアをさすようになると一人ひとりが部族の名誉を担って生きる。彼がもし他の部族の者に侮辱され、それを放置しておけば、それは彼自身の恥（腰抜け）であるばかりでなく、部族全体の恥になる。だから、男はいつも誇り高く生きなければならぬ。

また十四〜十五歳になると口髭を生やしはじめる。髭を生やしていることもイエメンでは一人前の男の証である。このあいだまで道路でサッカーに興じていた少年も、あどけなさのまだ残る顔にうつすらと髭を生やしはじめると同時にあまり無邪気に笑わなくなっていく。けなげにも精いっぱい

の背伸びをして男の仲間入りをしようとしているのである。

もちろん、男の子は父親を手伝って畑仕事に精を出し、女の子は母親を手伝って家の掃除をし、洗濯をし、パンを焼く練習をする。田舎では、十三―十四歳くらいの、まだ髭の生え揃わないような少年が自動車を運転している。当然免許などないが、車が動けばそれでいいのである。なかには座るとペダルに足が届かないので立ったまま運転している十歳そこそこの子供もいる。ちょうど小学校の低学年児が大人用の二六インチの自転車を運転しているような感じである。山道であろうと、ワデー（涸れ谷）底の砂利道であろうと、砂漠の中であろうと彼らの運転は巧みである。身体は小さくとも、彼らは立派な若者である。一人前とはこういうことを言うのだ。

ジャンピアをさすようになったら、男もいつでも結婚できる。由緒正しい家柄であれば、男が十四、女の子が十一歳くらいで結婚させられたものである。最近では、あまりそういう話は聞かない。特に男の子は学校に行く子が増えてきたので、結婚年齢は上昇する傾向にある。それに男は年々値上がりする婚資を稼がなくてはならないので昔のように早々と結婚というわけにはいかない。近代化が進むと、人間が一人前になるのが遅くなるのだ。

もつとも高校生だがすでに結婚して赤ん坊がいるという場合も珍しくはない。昔ながらの結婚観をもつ親は十代の後半になってもまだ結婚していない男は一人前でないと考えるので、親

がかりで結婚させるのである。甘えているようだが、彼らとて自分たちが働くようになったら父に代わって弟、妹をはじめ自分よりも年下の親族一同の面倒をみるのである。世の中は回りもちである。

髭が濃くなり、ジャンピーアもさまになってくると出稼ぎに出かける年代になる。こうなるとそろそろ父親は楽ができるようになってくる。サウジアラビアへの出稼ぎが盛んだった一九七〇年代から八〇年代には、父親が数年の出稼ぎから帰ってくると、石造りの新しい家を新築したものである。そのあと長男が入れ替わりに出稼ぎに出かけ、二、三年で帰ってきて結婚すると同時に父の建てた家に二階を建て増す。続いて次男が出稼ぎに行つてやはり自分の婚資を稼ぎ、貯めた金で三階を建てる、というのが田舎でよくみられた理想的なパターンであった。だから、イエメンの新築の家では、どこでも平たい屋根の上に鉄筋と配線用のビニールコードがむき出しになっている場合が多い。息子が稼いで帰ってくればすぐに建て増せるようになっていのである。出稼ぎに行つて、自分の学費を稼いできて、帰国後高校に行く者もいる。また、徴兵年齢になつても身代金を払えば徴兵を延期してもらえるので、このようにして出稼ぎを続けている者も多い。

サウジアラビアに行つたイエメン人は、未熟練・単純労働しかできないので肉体労働に就く者が多いのだが、ともかく近代化した町で世界中の工業製品に触れ、その便利さ精密さを経験

する。そして結婚するための資金を稼ぎ、弟たちの学資を仕送りし、帰国後に村に帰ってから商売を始めるための元手も貯めることができる。一方で同じアラブ人でありながら金持ちのサウジアラビア人にこき使われるという苦い経験も味わい、文盲ゆえに下級労働にしか就けないことを知り、教育の重要性にも気づく。さらにサウジアラビアの王制とイエメンの共和制の違いを実感し、場合によっては政治にも目覚めるかもしれない。

ある意味で現代イエメンでは、出稼ぎが「一人前」の男になるための一種の通過儀礼の役割を果たしているのである。

叔父さん

イエメンの子供は、年長者を敬うようにしつけられている。だから、家では父親の言うことは絶対である。小さいときから子供は大人の言うことをよく聞き、お使いを頼まれたら即座に実行する。年長者はみな敬わなければならないが、そのなかでも父の兄弟にあたる叔父さん（アンム）は特に大切であり、父の次に偉い人である。いざというときに自分たちを必ず守ってくれる人であり、父親が死んだり出稼ぎに行ったりしている間は文字どおり父親代わりになってくれる。

また通常、結婚相手として最初に考えられるのは父方のイトコどうしであるから、アンムは将来義父になる可能性も高いので、この意味でも大切な人なのである。

友人のムハンマドの家に遊びに行くと、しばしば彼の親戚らしい人が居合わせたものである。

ムハンマドとどういう関係の親戚かを尋ねると、帰ってくる答はほとんど決まって英語で「アングル（おじさん）」か「カズン（イトコ）」のどちらかであった。そういうことが何度か繰り返されるうちにぼくは「いくら何でもこんなにはたかさんイトコやおじさんがいるものだろうか」と疑問を抱くようになった。そこで、イトコとかおじさんと言われたときには、もう少し詳しく説明してくれと頼むようになった。その結果、ムハンマドとぼくとでは「アングル」と「カズン」の意味する範囲がかなり違うということに気がついた。

アラビア語では「おじさん」は「父の兄弟（アムム）」と「母の兄弟（ハール）」に厳密に区別されて呼ばれる。アムムとハールは、同じ親族とはいってもその重要性の点でまったく違う種類の人なのである。そしてイトコは「父の兄弟の娘（ピント・アムム）」とか、「母の兄弟の息子（イブン・ハール）」と言うようにそれぞれの性別と血筋によって呼ばれるのであり、これらを一まとめにした「イトコ」という単語はそもそもアラビア語にはないのである。そして、いつも重要なのは父方の血筋である。

さて、ムハンマドが「アングル」とか「カズン」と言ったときには、いったい誰をさしていたのだろうか。彼の説明を聞いているうちにぼくは彼の頭のなかの「英語Ⅱアラビア語辞書」の構造がわかってきた。彼が最初に「アングル」という単語を習ったとき、それは「父の兄弟と母の兄弟」という意味であると正しくインプットされたにちがいない。しかし、彼にとって

は同じアンクルとは言っても「父の兄弟（アンム）」と「母の兄弟（ハール）」はその近しさ、重要さにおいてずいぶんと開きがある。母の兄弟よりも近しい親戚の年長者もずいぶんいるのである。例えば父のイトコとか、おじいさんのイトコの息子とか。そこでムハンマドの頭のなかでは「アンクルというのはつまり、近しさ、重要さの点で父の兄弟と母の兄弟の間にいる年長の男たちすべてを指す呼び名である」という解釈が成立した。だから英語の「アンクル」の範囲はほぼすべての親戚を指すことになってしまふ。これは何もムハンマドに限ったことではない。

イエメン人の友人が「ぼくのおじさんは政府の高官だ」とか「ぼくのおじさんは軍の幹部だ」とか「ぼくのおじさんはあの会社の社長だ」とか言うのを聞いて、「へえ、立派な家柄の出身なんだね。でもそれにしちゃ、本人はあまりぱっとしないなあ」と思うことがある。あるいは「そんな立派なコネがあるなら、この件をおじさんの力でうまく片づけてくれないかな」と期待してもほとんどらちがあかなかつたりするのは、こういう「おじさん」だった場合である。そしてイエメン人が「アンクル」と言ったときにはこういう「おじさん」のほうが多いのである。だからこの場合は「同郷者」という意味で理解しておけば間違いない。さらに「カズン」となるともっと範囲が広がる。なにしろこの広義の「アンクル」の子供たちはみな「カズン」である。同郷の同年輩の者はほとんどすべてカズンといっても間違いない。

こうカズンがインフレしてしまつたら、本来の意味でのイトコと区別がつかなくなつてしまふ。田舎では親戚が同じ村に住んでいる例が多いので同年代のイトコは兄弟同様にいつも一緒に過ぐす。そこで、ムハンマドは兄弟同様に育つたイトコを「兄弟のようなカズン」と呼ぶのである。また、ムハンマドの父の末の弟は血縁上は叔父さん（アムム）だがムハンマドと同輩で、一緒に学校に通つた仲である。だから彼のことも「兄弟のようなアングル」と紹介することがある。そして、これはけつして誇張ではなく。彼らは互いに兄弟のように助け合う。

助け合いにもさまざまあるが、最も重要なのは金銭的な助け合いである。ムハンマドはすでに就職しているが、弟はまだ高校生と中学生である。父親はすでに隠居同然である。そこで彼は弟たちの養育に必要な金をすべて出してやる。同様に父親がすでに死んでしまつた年少のイトコを学校に通わせる必要があると思えば、金を出して通わせ、また婚期のきたイトコのためには結婚相手を探し、婚資が足りなければ貸してやる。親戚の者が経済的に困っているのに助けの手をさしのべないのは男の恥である。かつてムハンマドもこうして大学まで通わせてもらったのである。

金が必要なときにイエメンでは銀行はほとんど役に立たない。銀行制度がまだ信用されていないのと、預金の利子を受け取るのはイスラムの精神に反するからである。だから金が必要なきに頼りになるのは親戚だけなのである。また、出稼ぎで稼いだ元手で事業を始めるとき、

持ち帰る。「××村サナア出張所」のようになる。それが親戚であり、叔父さんの役目なのである。少しくらい遠い親戚だからといって、頼ってきた者を追い返したりするのは、恥である。人が集まることは、その家の主人の寛大さと度量の広さを示す指標なのである。



サナアに住んでいる同郷者が、たまの金曜日に「叔父さん」の家に集まって食事をする。広範囲の親戚が集まるので一種の同郷会の雰囲気である。

まず雇用するのは親戚の者である。事業が順調に推移すれば、多くの親戚の者が成功者を頼って集まってくる。サナアで店を構えれば、同郷者の上京の際には宿屋になり、学生にとっては下宿代わりになる。そしてサナアに住んでいる同郷の若い夫婦にとつては週末に訪れる親代りともなる。村で病人が出たという知らせが届けば薬を買って送ってやり、村で結婚式があるとときには必要な家財道具を買って

良い叔父さんとは、スネをたくさんかじられる叔父さんである。

年寄り

イエメン人の平均寿命はかなり短い。一九九〇年頃の数字で四六・三歳である。平均寿命というのは、みんながこれくらいまで生きる、あるいはこれ以上は生きられないというわけではない。今生まれた赤ん坊がどのくらいまで生きる可能性があるか、という数値である。乳幼児死亡率が高い国では、生き残る確率が低いので、平均寿命(期待余命)は低くなる。つまり、よっぽど丈夫な子でないと大人になるまで生き残れないのである。

ところが、いったん大人になってしまうと、厳しい生活・衛生環境で生き延びてきた人たちばかりなので、ひよわな日本人よりよっぽど丈夫で、頑丈である。滅多なことでは死なない。イエメン人にも六〇歳、七〇歳のお年寄りは結構たくさんいるのである。

自然淘汰という言葉があるが、イエメン人の年寄りを見てみるとこの言葉の意味が重く感じられる。生き残るだけの力と運を持った人しか、この年までは生き延びられないのだ。仮に一九九〇年に六〇歳になったおじいさんがいたとしよう(日本では六〇歳などまだまだ老人扱いするのは失礼だが、イエメンでは六〇歳は立派な老人である)。彼の生まれたのは一九三〇年、日本では昭和五年である。このころイエメンはイマーム・ヤヒヤが率いる鎖国国家であり、北イエメンの山岳地は第二次世界大戦前のうねりとは無関係に閉ざされた生活を続けていた。一般庶民にはラジオもあまり馴染みがなく、薬や眼鏡などもめったに手に入らなかった。自動車はお

るか舗装道路も一本もなかったのである。その後一九六二年に革命が起こり、イマーム派と革命派の間で激しい内戦が続く。多くの男がこの戦いで命を落とした。ようやく一九七〇年に内戦が終結し、共和国派が勝利した。北イエメンの近代化はこのときから始まるのである。その後保守的自由主義政権となった北イエメンと社会主義政権を立てた南イエメンとの間で三度にわたる激しい内戦が戦われた。このほか、反政府勢力による武力活動も一九八〇年代前半までは盛んで、七七年、七八年と続けて北イエメンの二人の大統領が暗殺された。ようやく国家として安定してきたのは八〇年代に入ってからである。六〇歳になる人はこうした激動のなかを生きてきたのである。

生死をかけた戦闘が日常茶飯事であるこの社会で、ここまで生き延びてきたからだろうか、イエ



町なかを歩くおじさんと孫の組み合わせはよく見かける。甘える孫ではなくおじさんを敬い、かつかばいながら歩いている。

メンの年寄りはみな味わい深い顔をしている。どの顔も思わず写真に撮りたくなくなるような顔である。強い陽射しにさらされてきたじいさんの顔には一本一本の皺が深く刻まれている。かつて険しかったであろう目つきも、年を経るにしたがつて柔和になり、静かな物腰には上品ささえ漂う。とりわけモスクの中でコーランを読んでいる姿などは、地上の至福を身に受けているかのような神々しさに包まれている。

もつとも、顔を見てかれこれ八〇歳近いかと思うじいさんが、年齢を聞いてみるとまだ五十代の半ばだったりすることはよくある。女性の場合、肉体の老化はもつと激しい。ある程度の年になると女性でも顔を隠さなくなるのだが、皺のぐあいから六〇歳くらいかと思うとまだ四十代ということもしばしばある。考えてみれば、十五歳になるかならずで嫁にいき、それから一二年おきに一〇人ばかり子供を産むのである。そのうち三人ほどが赤ん坊のころに死に、長男は内戦で死んだ、などという経歴をたどってくれば体力的にも精神的にもやつれるのは早いだろう。母体を休ませる暇もなく続けざまに妊娠・出産を繰り返し、いちばん下の子をとにかく一人前にしたら四〇歳、わが身をすり減らすような人生ではある。だから女のほうがやつれるのはいつそう早い。

長女がやはり十五歳くらいで嫁に行けば早ければ三〇歳そこで孫ができる。最近の日本なら、まだ自分自身が結婚していなくても珍しくない年齢である。もちろん学校に行く機会な



農夫。杖を持つ手、深い皺、そしてターバンの巻き方まですべてが絵になる姿である。

ど与えられなかった場合が多い。なにしろ革命の起こった一九六二年まで女学校など皆無だったのだ。女性の高学歴化、有職化が進み、女性がますます子供を産まなくなっている日本と、イエメンのような国と同じ星の上に存在していることがときどき不思議に思えることもある。遠いとはいえ、一万キロ。飛行機を乗り継いで一昼夜の距離である。

イエメンを訪れた外国人の感想は「なんて素敵な国だろう、この国が大好き。また来たい」という人と「なんてひどい国だろう、二度と来たくない」という人におもしろいほど真つ二つに分かれ、その中間はない。

貧しさよりも人々の生活の素朴さ、ゆとりのある生活のリズムなどに目を向ける人には、シバの女王のロマンやダイナミックな自然の姿も好まし

いものに見えるだろう。

もちろんぼくもイエメンが好きである。しかし、「イエメン人の生活こそ、自由で自然な人間の生活。日本のあくせく、せかせかした生活なんて本当の幸福じゃない」と無邪気に讃える気にはなれない。

ぼくが日本で生まれた年（一九五七年）にイエメンの山の中の村に生まれた（イエメンではまだ革命前、鎖国中である）女の子は、ぼくがようやくやく中学校で英語を習い始めたころに嫁に行き、ぼくが中学・高校・大学と親のすねをかじってテニスなどしていた間、身体中の栄養分とエネルギーを費やして子供を産み続けてきたのだ。そしていまではすでに孫があるかもしれない。彼女は小学校に行ったこともなく、たぶん自分の名前を書くこともできない。車やビデオを作るのが得意な日本という国がどこか遠くにあることは、テレビで見えて知っているだろうが、もちろんどこにあるかは知らない。彼女は首都のサナアに行くことはおろか自分の村から外に出た経験がないかもしれない。これは大げさな話ではない。女性が村の外に出る必要などないのである。

もちろんそれでも彼女は幸せであろう。子供が元気で、自分も大した病気をせずに今日まで生き延びてきたのならば、充分幸せにちがいない。彼女らの人生を哀れむのもまた、外国人の傲慢というものだ。

イエメンでは年寄りがいい顔をしている。それはたどってきた人生を彫り込んだ顔だからであり、また彼らほど長く生きながらえることができなかつた、多くの同世代の人々の人生をも反映しているからかもしれない。